学びを支援する教員の奮闘

本紙企画「授業のユニバーサルデザイン」

この4月から私立大学でも合理的配慮が法的義務化することにちなみ、私立各大学ではその整備が進んでいるところであるが、本紙では『授業のユニバーサルデザイン』をテーマに、その事例を日本私立大学協会（小原芳明会長）の加盟大学に募集、全国から7大学9件の応募があった。そのうちの3件を紹介する。

2024年に改正障害者差別解消法が施行されることにより、「合理的配慮」の提供は私立大学も含め、全ての大学等にとって法的義務となる。

各大学においては、すでに学生支援部門を中心に諸制度や仕組みを整備されていることであろう。しかし、教室では、こうした配慮に限らず、診断を受けていないグレーゾーンにいる学生や、基礎学力や学習意欲が高くはない学生も存在するなど、学生の多様化が進行している。これに対応すべく、多くの教職員が苦労して工夫しながら、授業を提供している。

そこで、本紙では、特定学生への特別な配慮にとどまらず、多様化するあらゆる学生に対応しうる「ユニバーサルデザインの授業事例」を収集し、他大学でも活用できそうなものについては、本欄で紹介することとした。

これまでの企画同様、日本高等教育開発協会（JAED、中井俊樹会長）の協力を得て、日本私立大学協会の加盟大学に募集し、応募してもらった事例から、特に他大学に参考になりそうな取り組みを選定し、同協会の会員にオンラインで取材等をしてもらい、本紙にて紹介するもの。

その結果、全国の▽北海道科学大学（1件）、▽北星学園大学（1件）、▽東京工科大学（1件）、▽常葉大学（2件）、▽日本福祉大学（2件）、▽朝日大学（1件）、▽福岡工業大学（1件）の7大学から9件の応募があった。このたびは、そのうち東京工科大学、朝日大学、福岡工業大学の事例を選定して掲載する。

なお、今号に先駆けて、その他の事例を本紙にて紹介している。これらの事例についてはまとめて本紙ウェブサイトに掲載をする予定。

また、2024年度も同様の企画を実施する予定である。

文字を積極活用した大規模講義科目

東京工科大学　メディア学部科目「音楽産業入門」

東京工科大学メディア学部の「音楽産業入門」は、同学部1年次後期開講の選択科目である。メディアと音楽産業は密接に関わっているため学生の関心も高く、学部学生の3分の2にあたる200名の学生が受講する大規模講義科目となっている。

コロナ禍ではリアルタイム配信型の遠隔授業や、対面と遠隔を同時に行うハイフレックス型の授業形態をとっていたが、現在はネットワーク上のトラブル発生リスクも考慮して対面授業となっている。この科目において、文字を積極的に活用したユニバーサルデザインの授業づくりに取り組んでいるのが吉岡英樹先生である。聴覚障害学生だけでなく、音声による言葉の聞き取りの状況や日本語の理解度に関わらず、全ての学生にとって理解しやすい授業づくりを目指す吉岡先生の授業実践を紹介したい。

授業時の教卓の様子

コロナ禍で作成した授業動画を活用

コロナ禍では、学生が理解しやすくかつ集中して視聴できる授業動画づくりに心血を注いだ。1本の動画を短めに作成することはもちろん、内容に合わせたBGMを挿入し、すべてに字幕を挿入することで、難しい内容でも飽きずに視聴できる動画を作成した。それをお蔵入りにしてしまうのはもったいない。

対面授業に戻った現在でも、10分授業のなかで1回20分程度の動画を2回視聴する時間をとっている。

「LINEオープンチャット」で相互コミュニケーション

学生はただ動画を眺めているだけではない。動画を見ながら手元のPC上でコメントや質問をメモしている。動画が終わるタイミングで、コメントや質問を、教員が用意した授業用のLINEオープンチャット上に投稿するためである。投稿は全員必須なので、200個近いコメントが並ぶことになる。教員はそれを確認しながら、口頭でフィードバックしていく。

オープンチャットは、動画へのコメントだけでなく、受講生アンケートにも利用できる。書き込みは記名式だ。記名だからこそ教員は個別学生の状況を理解でき、学生は自身の発言への責任感を持つことができる。また、オープンチャットであるため、個人のアカウント情報が他の学生に知られることもなく、安心して利用できる。

コロナ禍以前は学生にコメントを求める際、マイクを回して半ば強引に発言を求めてきた。この方法では、全員の学生の考えや疑問を拾うことはできないし、うまく発言できない学生も出てきてしまう。一方、文字でやりとりできるLINEであれば、学生も使い慣れていて発信しやすく、かつ短時間で全ての学生の考えを網羅できるという利点がある。

このLINEオープンチャットを、授業（3講時）開始前の昼休みにも使っている。その日の授業の導入となるようなニュースや記事URLを配信するのだ。そうすることで、授業開始前から授業内容への動機づけをすることができる。

授業終了時に「Google フォーム」で授業課題を実施

授業終了時にも工夫している。Googleフォームを活用した授業課題の配信だ。この科目の成績は、授業中課題100%となっており、レポートや期末テスト等は行っていない。つまり学生は毎回の授業理解を積み上げていくことが最重要となるので、授業を集中して受講するようになる。授業課題は多肢選択問題や記述問題などを織り交ぜている。正答率が低かった問題は、翌週の授業で取り上げて詳しく説明する。

また、設問の最後には教員に自由に質問できる欄も設けている。当該授業回の範囲でなくとも、音楽産業に関することであればどのような質問でも構わないと学生に伝えてある。質問に対する回答は、翌週の授業までに教員がPDFにまとめて公開している。

教員が学生の理解度を常に把握し、授業内容を理解できないでいる学生を放置せず、学びを積み上げていけるような双方向性を文字ベースで担保している。

「UDトーク」で教員の発話を文字化

吉岡先生の授業は、RTT（リアルタイムテキスト）ツールである「UDトーク」を通じて、すべての発話が即時に文字化され、受講生全員に配信される。図のように教卓上のスマートフォンで「UDトーク」アプリを起動し、自動的な文字変換を行っているのである。受講生にはあらかじめ、変換された文字を見ることが出来るURLを共有してあり、自身のPC等で自由に、かつリアルタイムに見ることができる。また、文字情報はデータとして残り続けるため、授業終了後の復習材料としても利用できる。なお、自動変換が上手くいかないこともあるため、本科目を受講済の学部学生1名にSA（スチューデント・アシスタント）になってもらい、間違った文字変換を即時修正してもらうようにしている。

吉岡先生が独自にアンケートをとったところ、この仕組みをI割程度の受講生が利用していることが明らかになった。受講生の中に聴覚障害学生は1名しかいないため、他の20名近くの学生の学びの助けにもなっていることがわかる。彼らの自由記述には、「聞き逃した箇所を見返すことができる」「音声のみだと曖昧な言葉も、明確に理解できる」「教室の音響的な環境に関わらず、情報がしっかり伝わる」「後で復習するときにテキスト検索することができる」などとあり、様々な学生の学びやすさにつながっていることがわかる。

また、UDトークを利用する隠れたメリットとして、教員の説明が分かりやすくなると吉岡先生は語る。UDトークが音声を認識しやすくなるように、こまめに間をとって話したり、一文を短くして話すように心がけるためである。

＊UDトークについては、「アプリ導入プログラム」を申請し、無償で活用している。

まとめ

この事例から学べることは、対面であっても「文字」と「ツール」を積極的に活用することが授業のユニバーサルデザインにつながるということである。コロナ禍においては、やむなくチャットを通じた学生とのやりとりを試みたものだ。その結果、対面授業の時よりも学生の声を多く、平等に拾うことができたという。遠隔授業でおこなっていたことを、対面授業に再度持ち込むという発想が、あらゆる学生の授業参加と理解を促すことにつながる可能性を吉岡先生の授業実践は示している。（京都橘大学　西野　毅朗）

先生が手本を示す教職科目

朝日大学　教職課程センター科目「社会科教育法Ⅰ」

朝日大学法学部の「社会科教育法Ⅰ」は、2年次前期開講の教職必修科目である。この授業では、中学校社会科の目標・内容やさまざまな学習指導法等を学んだ後、学生は模擬授業を行う。2023年度の受講者数は10名であり、教師を目指す学生たちの意欲は高い。しかし「わかる授業」を実施するための教科指導力や教科に対する知識は十分とは言えない。授業を担当する虫賀文人先生は、高校教員、教頭そして校長としての実務経験を持ち、10年以上前から「ユニバーサルデザインの考え方を取り入れた授業」に取り組んでいる。将来教師を目指す学生に対して虫賀先生ご自身が手本として示している「ユニバーサルデザインの考え方を取り入れた授業」の手法や授業実践を紹介したい。

電子黒板とタブレット端末を活用した視覚的な授業手法を学ぶ

「ユニバーサルデザインの考え方を取り入れた授業」

ユニバーサルデザインとは、「できるだけ多くの人が利用可能なデザイン」、「全ての人を対象に初めからバリアをつくらないデザイン」である。この考え方から、「ユニバーサルデザインを取り入れた授業」とは、「特別な支援を必要とする子供たちを包有する授業のことである」と虫賀先生は説明する。対象となる子供の「困った」状態をきっかけに、クラス全体を対象に「わかりやすく」、「うまくできる」、「結果が見える」支援を検討すれば、誰もが学びやすくなると言う。この視点を大事にしながら、授業を実践している。

その背景には、教頭として初めて赴任された定時制高校での経験がある。不登校経験、外国籍の生徒など特別な支援を必要とする生徒に対して、わかりやすい授業を展開するために、学校を上げてユニバーサルデザインを取り入れた授業に取り組んだ。1人ではなく、全教員の共通理解の上での実践に意義を感じたそうだ。

学生への手本としての授業―「わかる授業」にするための工夫

将来教師を目指す学生に、虫賀先生ご自身がユニバーサルデザインの考え方を取り入れた授業づくりの手本を示している。曖昧さやつまずきやすい部分を取り除く配慮について、学生たちに具体的な事例を挙げて伝えている。その工夫や留意点の一部を紹介する。

1点目は授業の流れを示すことである。今日の授業はどのような順番でやり、どこまで行くと終わるのかを明確にする。毎回の授業開始時に授業の目標および流れを示しておく。

2点目は、視覚的に示すことである。たとえば写真、イラスト、カード類を活用することによって、生徒は教員が説明している内容を理解しやすくなる。プロジェクターやプレゼンソフトのほか、黒板／ホワイトボードに「目標」「ポイント」「まとめ」などのマグネットを提示する方法も紹介している。たとえば、「課題を5分以内で行いなさい」と口頭で伝えるよりも、板書する方が生徒に伝わりやすい。さらに「5分以内」という表現よりも「15時30分まで」と板書する方がわかりやすいことまで伝えている。また、学校現場で導入されているタブレットを活用した授業手法についても指導している。

3点目は教員の話し方である。1文には1動詞（動作）を心がけて話す。たとえば、「最初にテキストを読んで練習問題をします」と指示するのではなく、「最初にテキストを読みます」「次に練習問題をします」というように、文を分けて説明（指示）する。その方が生徒は何をすればよいのかを理解しやすくなる。

できるだけ具体的な表現を使うようにする。たとえば課題の時間を延長する場合に「あと少し時間を伸ばします」ではなく、「あと5分延長します」と伝える。「あと少し」とは何分だろうと考えこむ生徒も出てくる可能性があるからだ。よくない話し方として、余分な言葉「え～」「あの～」の多用のほか、語尾が明確でない、抑揚がない、言葉があいまい、早口は聴きとろうとして疲れることも説明している。

共感を広げるクラスづくり

授業だけでなく、教室環境や人的環境におけるユニバーサルデザインについても伝えている。わかる授業のためには、その前提として生徒が安心して学ぶことができる場をつくることが教員に求められている。誰かの失敗を笑ったり、誰かの意見を攻撃的に批判したり、話し合いの際に仲間外れにしないような工夫や配慮が必要とされる。

共感が広がるクラスでは、誰もが「わからない」「できない」を表現しやすくなるという。「あっ、そうか」「いいね、それ」といった共感のつぶやきを大切にする。また、発言の際に他の人の意見に対して否定しないで「○○さんに付け足して」や「○○さんの話を聞いてそう思ったんだけど」のように、相手が発言したことに対して、プラスアルファで意見を加えるような言い方を大切にするよう学生に伝えている。

学生による模擬授業

社会科教育の教科指導や教科に関する知識とともに、ユニバーサルデザインを取り入れた授業手法を学んだ後に、学生は模擬授業を行う。模擬授業の中では、上述した手本を見習った様子が見られる。

授業を担当する学生は学習指導案の中で、ユニバーサルデザインを意識した箇所を明示する。また授業の開始時に必ず目標を提示する。授業の進行では、どこを説明しているのか、がわかるように示す。たとえばパワーポイントを利用する場合に、授業全体のどの位置を説明しているのかを明確に示すよう工夫する学生もいる。

授業後は質問タイムを設け、授業を担当した学生に対して質問をする。次に授業担当の学生から、反省点や工夫した点を話し、生徒役の学生1人ひとりから授業の良かった点とアドバイスのフィードバックを行っていく。また、「模擬授業評価ルーブリックシート」を利用して、授業内容及び話し方や板書などのユニバーサルデザインの活用状況について検証も行っている。

模擬授業を重ねていく中で、改善点をアドバイスできるようになっている。ほかの学生の意見を否定しないで、「Aさんの意見につけ足して・・」というように、プラスアルファで伝える発言によって生徒役の学生が意見を伝えていく。仮に間違ったことがあった場合も、間違えるところから学びが深まっていくということを教員から伝え、指導している。

この授業に対して、学生からは「パワポを使って視覚的に訴えるわかりやすい授業であった」「授業展開の仕方が順を追っており大変わかりやすかった」「学ぶ立場から教える立場になることが、いかに難しいことであるかがよく分かった」といった意見が寄せられている。

まとめ

この事例から学べることは、すべての学生にとってわかりやすい授業のための教員の工夫や配慮である。将来教師を目指している学生に、授業内で教員が手本を示し、学生が模擬授業で学んだことを実践する機会が設けられている。さらにふりかえりの時間においても、お互いを尊重した発言が見られ、人的環境が整っていることが理解できる。手本から学び実践そしてふりかえりのプロセスの中で、ユニバーサルデザインを学生たちに意識させる教育手法がとられている。

今回の虫賀先生の事例は教職科目であったが、紹介した内容や手法は、大学での授業においても意識することで応用可能なものである。（追手門学院大学　清水栄子）

自己調整学習を取り入れたオリエンテーション

福岡工業大学　「単位取得不足者を対象とした後期オリエンテーション」

福岡工業大学の「単位取得不足者を対象とした後期オリエンテーション」は、全学部全学科の単位修得不足者を対象とする取組である。この取組は、学修や単位取得につまずきを抱える学生の正課の学修の充実とスムーズな進級をサポートするために位置づけられている。対象となる学生は、設定された基準単位数に到達していない、留年予備軍の学生である。オリエンテーションは①教務担当者からの説明、②学習支援センターからの案内、③自己調整学習に基づく目標・計画設定で構成される。

オリエンテーションの中で、③自己調整学習に基づく目標・計画設定を担当されるのが、土屋麻衣子先生である。先生は、学習につまずきを抱える学生のディモチベーション（動機づけが減退している状態）の原因究明の研究と、それを解決するために必要な自己調整学習の研究者である。ご研究を踏まえて、オリエンテーションに参加する学生の気持ちを察し、「参加してよかった」と心から思ってもらえるよう、彼らの意識変容を願い担当される。

今回紹介するオリエンテーションは、「学びのユニバーサルデザイン（以下、UDLと略す）」の考え方と一致する。UDLとは、「自分の学びを調整して舵取りができる学習者を育てることを目的とする」（川俣、2020）考え方である。つまり、自己調整できる学習者の育成である。土屋先生が取り組まれている「UDLの考え方を取り入れたオリエンテーション」の手法や実践を紹介したい。

「UDLの考え方を取り入れたオリエンテーション」

UDLは、「私たちのマインドセットを『どう教えるか』から、『（学習者）がどう学ぶか』にシフトさせることから始まる。（中略）学習の主体は、『学習者』であり、私たち指導者は学習者の学びを助ける環境づくりをし、伴走する」（亀山、2020）考え方である。

土屋先生は、先行研究を踏まえて、学生の意欲を欠く要素を含まないこと、細部にわたり動機づけの手法を取り入れて研修を構成される。また、学生の意欲喚起に欠かせないのは、的確な自己省察と自己効力感を高めるための目標と計画の設定であると考えられ、それができるように誘う機会と捉えられている。ゆえに、オリエンテーションを担当する教職員は、オリエンテーションに「注意や指導」というスタンスではなく「応援」する姿勢で臨まれる。学生へのスタンスは、打ち合わせの段階から教職員で一致一貫されている。

ワークの様子

この背景には、福岡工業大学では、教職協働が重視されており、オリエンテーションも教務課の榎田さん、増永さんを中心として、学習支援センター、土屋先生の三位一体で実施されている。オリエンテーションは、2021年より、教務課が実施されている取組で、コロナ禍に単位不足者が増加し、学生の学習の継続に危機感を持ったことからはじまられた。担当者の榎田さんによると学生が学習に向かえない原因調査をされるなかで、入学後に学びについて行けない学生は、自己調整が出来ていないのでないかと考えられたそうだ。また、職員も学生の自己調整力を向上させられるようなことができれば、学生サポートレベルが上がるのではないかという気持ちから、2022度のオリエンテーションの研修部分を、教務課から土屋先生に依頼された。

「自己調整学習を知る意義」の伝達

土屋先生は、「年次の初めに目標を立てる、ポートフォリオに、目標を書く活動について、書いて終わっている現実がある」と指摘する。また、つまずきを抱えてしまいがちな学生さんは、目標をその場で書いて終わり、1週間後には何を書いたか忘れているような目標設定に対する取組の形骸化を訴える。これに対して、研修の最初に、「自己調整学習を知る意義」をレクチャーされ、その中で「方法を知れば改善する」というメッセージを発信される。

目標と計画設定のワーク1

次は、現在の目標や計画の立て方が自己調整に与える影響を認識させるワークである。ワークでは、学生に今までのことを振り返ってもらい、うまくいったこととといかなかったことについて、参加者同士で話しあう。

続けて、参加者に仮の課題に対する目標と計画を立ててもらい、参加者同士で目標と計画を共有する。ここで土屋先生は、参加者は十人十色であるはずなのに同じ方法でうまくいくのかどうかという問いを投げかける。そして、目標や計画は自分の生活、やる気、性格等さまざまな要素を考えながら、自分で自分が動く仕組みづくりとなるように立てることが必要であるという説明される。

目標と計画設定のワーク2

続けて、参加者は土屋先生のオリジナルのワークシート「自己調整的目標・計画の立てDrive yourself by yourself」を用いて、後期の学修に対する目標と計画を立てる。ワークシートには、自己調整の観点から、目標と計画の設定の際には自身の動機づけの確認（マインドセット）が欠かせないため、じっくりと考えるチェック項目が載せられている。計画、目標を記入した後に、チェック項目に照らし合わせてチェックする。この作業を経て、自分を動かすための目標と計画の設定となる。さらに、学生に時間をかけて考案することを推奨し、その場で提出するのではなく1週間の作成期間を設けている。

教職協働によるフォロー体制の構築

学生が目標と計画の設定を行った後は、教務課の職員による面談が実施され個別にフィードバックが行われる。面談後も定期的に声掛け等を実施し、参加者の意識向上と意欲の保持を図る。また、教務課では、後期オリエンテーション実施後に、自己調整が定着していない学生や後期オリエンテーション参加していない学生に対しても丁寧にフォローアップされている。このようにオリエンテーションで終わるのでなく、教務課の職員が、学生の目標・計画に伴走されるフォロー体制を構築されている。

オリエンテーションの効果について

オリエンテーションに参加し、半年後にアンケートに回答した約7割の学生が後期のGPAを前期より向上させた。中には0・5～2・0の大幅アップを達成した学生もいたとのこと。また、前期終了時に進級が不安視されていた学生のうち、結果的に進級となった学生の6～9割（学部によって異なる）がオリエンテーション参加者であったそうだ。

まとめ

福岡工業大学教養力育成センター土屋先生の事例から学べることは、学生の目標到達を助ける環境づくりと伴走する仕掛けである。そのためには、私たち大学人は、学生へのかかわりを「注意や指導」というスタンスではなく「応援」する姿勢にマインドセットする必要があるのではないだろうか。

学習のつまずきを抱える学生は、どこの大学にもいる。土屋先生は、「能力ではなく、勉強の仕方や目標の立て方がわからないがゆえに、ここまで来ているという学生が多いのではないか」と話される。大学に求められることは、勉強の仕方や目標の立て方を伝え、学生を学びの主体者にする取組と学生に伴走するシステムを構築することである。この手法は、決して教員だけ、職員だけで行うものではない、教職協働が進展する大学教育において取り入れ可能なモデルと考える。（高知大学　杉田郁代）

〈引用文献・参考文献〉
・UDLとは何か　バーンズ亀山静子　『指導と評価』第66巻2月号　2020
・学習支援から学習者の発達支援へ　川俣智路　『指導と評価』第66巻2月号　2020